JICA 教師海外研修 授業実践報告書

Zambia

学校名：埼玉県立松山高等学校

氏名： 大野 直知

［担当教科：地理歴史（地理）］

- 実践教科等： 世界史Ｂ
- 時間数 ： 5 時間
- 対象生徒 ： 高校 1 年生
- 対象人数 ： 35 人×4クラス

1 単元名 「アフリカの植民地化と独立後の課題」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（国立教育政策研究所が例として示したもの）

（1）現代のアフリカ諸国が抱えている「貧困」という問題について、その原因を帝国主義列強によるアフリカの植民地化以後の歴史的過程から理解する。【多面的、総合的に考える力】

（2）「貧困」の解決に向けた国際社会の役割と自分自身の関わり方を主体的に考える。【未来像を予測して計画を立てる力】【進んで参加する態度】

（3）他者との意見交換や話し合い活動を通じて問題を解決しようとする姿勢を身につける。【コミュニケーションを行う力】【他者と協力する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点（国立教育政策研究所・2014）

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
2 子供の多様な考えを引き出す
3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
4 考えるための教材を見極めて提供する
5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

（1）教材観

本単元では、帝国主義列強によるアフリカ分割と独立の歴史、及び独立後のアフリカ諸国が抱えている問題を理解させた上で、それらの問題解決に向けた取り組みを考察させる。これは、現行の学習指導要領（2009 年 3 月告示）に示される「歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」という世界史Ｂの目標を体現することをねらいとしている。

本単元は、主に学習指導要領に示される世界史Ｂの内容「(5) 地球世界の到来」「ア 帝国主義と社会の変容」に位置づけられるが、同じ大項目のアフリカに関する内容もまとめて通史的にしたものである。そのため、まず本単元の前において、帝国主義諸国が世界各地に進出して植民地や勢力圏の獲得競争を繰り広げた背景を理解する。そして、本単元を通じてアフリカの植民地化と独立後の課題を学んだ後に、東南アジアや太平洋地域において激化する帝国主義諸国間の抗争が第一次世界大戦につながるという歴史的な経緯を学習する。

（2）生徒観

本校は男子校で運動部が盛んであり、素直で元気な生徒が多い。授業を実施する4クラスでは、いずれも、この単元以前に知識構成型ジグソー法による協調学習を数回取り入れており、活発な議論を展開していた。この授業で扱うアフリカの植民地化の歴史や国際協力については、中学校社会科である程度学習しているため、「人為的国境線」「モノカルチャー経済」「政府開発援助（以下、ODA）」「青年海外協力隊」といった単語を断片的に覚えているものの、それらの単語を有機的に結びつけて確固たる知識・理解を形成するには至っていないことが予想される。

（3）指導観

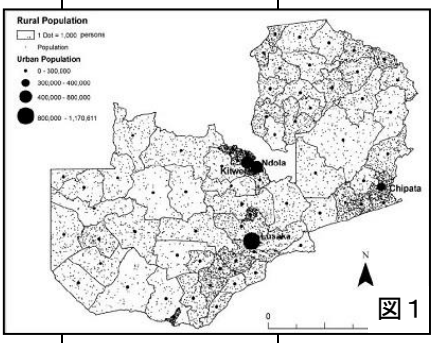
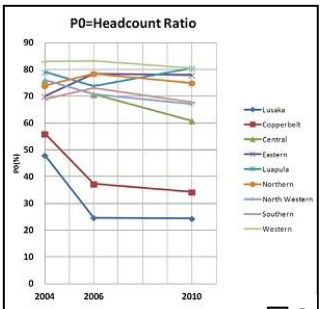
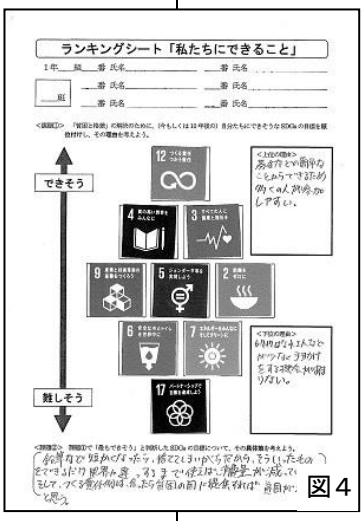
上述の通り、本校の生徒は話し合い等の活動に積極的な生徒が多いことから、ペアワークや知識構成型ジグソー法、グループワークによるダイヤモンドランキングといったアクティブ・ラーニング（以下 AL）の手法を取り入れて、他者との対話を通じて問題を解決させる指導形態を多く導入した。

5 評価規準

観点	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
評価規準	●現代のアフリカが抱える「貧困」の問題について、その植民地化以降の歴史的過程から理解し、その知識を身につけている。 ●提示された地図やグラフ、写真から、必要な情報を読み取ることができる。	●アフリカや世界の抱える「貧困」の問題について、その解決への取り組み方を考え、自分なりの意見を持ち、それらを文章にまとめている。	●アフリカや世界の抱える「貧困」の問題を自分事として捉えようとしている。 ●話し合い活動等に積極的に参加している。
評価方法	学習プロセスシート（図８）・ワークシート・ノートの提出状況 定期考査における論述問題		

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカの植民地化	自国の経済的利益を優先した列強の帝国主義政策によりアフリカが分割された経緯を説明できるようになる。	●本単元の軸となる問い「『貧困』について、あなたの考えを述べよ」に対する学習前の答えを「学習プロセスシート」に記入し、発表し合う。【一枚ポートフォリオ】 ●アフリカが分割される背景として、19 世紀に進んだ内陸部の探検及び植民地化の原則が定められた 1884～85 年のベルリン会議を知り、英仏独伊を中心とする列強諸国により WWⅠ前にはエチオピア・リベリアを除くアフリカ全土が植民地になったことを理解する。 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と歴史」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
2	アフリカ諸国の独立と課題（ザンビアの例）	現代のアフリカ諸国が抱えている「貧困」という問題について、その原因を帝国主義列強によるアフリカの植民地化以後の歴史的過程から説明できるようになる。	●戦後にアフリカ諸国が独立していく過程を理解し、独立後にはモノカルチャー経済により経済基盤が弱いこと、内戦・クーデター等で政情不安となっていることなどから、アフリカ諸国は慢性的な貧困状態にあることを理解する。 ●写真を通じて、ザンビアがイギリスの植民地であったことやその影響で現在でも銅のモノカルチャー経済であること（写真１）、隣国の大国南アフリカ共和国からの輸入に依存していること等を読み取り、極度の貧困状態にある人々の割合が高いこと（写真２）に気付く。【ペアワーク・フォトランゲージ】 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と歴史」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。 写真１ 写真２
3	ザンビアと世界の「貧困」と私たちの未来	ザンビアやアメリカ合衆国の事例から「貧困と格差」の問題は全体的な経済発展によって解決される	●ザンビアの１人あたりの GDP の経年推移を示したグラフからザンビアが急激な経済成長を遂げていることを読み取る。 ●「経済発展に伴ってザンビア社会はどのように変化しているか」という問いの答えを他の生徒との対話を通じて考え、首都ルサカや資源豊富なカッパーベルトの都市とそれ以外の地域の農村との間に経済格差が拡

		ものではないことを理解し、持続可能な世界を考えるきっかけとなる。	大してきていることを学ぶ。【知識構成型ジグソー法（図1・2・3）】 ●様々な図表から世界全体・日本・アメリカ合衆国における格差に気付き、このまま「貧困と格差」が解決されなかった場合にこの世界はどうなるのかを考える。【ペアワーク】 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と未来」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。  図１ 図２  図 III-5 ザンビアの地域別貧困率（2004～2010 図３
4	理想的な国際協力の在り方	国際協力とは援助する側もされる側もお互いに利益になる関係性であることを理解し、「貧困と格差」の問題を克服した持続可能な世界を考えるうえでの方向性となる。	●日本の国際協力の現状として、ODA や独立行政法人国際協力機構（以下 JICA）の事業について理解する。 ●「理想的な国際協力とはどのようなものか」という問いの答えを他の生徒との対話を通じて考え、援助する側はされる側が自立できるように配慮しつつ相互に利益になる関係性が理想的であるということに気付く。【知識構成型ジグソー法（図5・6・7）】 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と国際協力」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。
5	私たちにできること	「貧困と格差」の問題解決のために自分自身ができることを考え、持続可能な世界に向けて自ら行動できるようになる。  図４	●持続可能な開発目標（以下 SDGs）について理解し、既に授業で示したザンビアの貧困を象徴する写真（写真２）や本校が所在する東松山市の名物「やきとり」（写真３）を SDGs の観点から説明する。【ペアワーク・フォトランゲージ】 ●「貧困と格差」の解決のために、（今もしくは 10 年後の）自分にできそうなものという視点で SDGs の目標を順位付けし、「最もできそう」であると判断した目標の具体策を考え、発表し合う。【グループワーク・ダイヤモンドランキング（図４）】 ●本時の授業内容を踏まえて、「貧困と自分」に関する自分の考えを「学習プロセスシート」に記入する。 ●「学習プロセスシート」を使って、本単元の学習前に答えた「『貧困』について、あなたの考えを述べよ」という問いにもう一度答え、学習前の答えと比較して自己評価を行い、発表し合う。【一枚ポートフォリオ】 写真３

7 授業事例の紹介

小単元名【理想的な国際協力の在り方】

（1） 指導案

（ア）実施日時 11 月 17 日（金）第６限

（イ）実施会場 １年５組教室

（ウ）本時の目標

●様々な立場や方法による国際協力の事例から理想的な国際協力の在り方を考え、国際協力とは援助する側もされる側もお互いに利益になる関係性であることを理解し、国際協力に積極的に参加する姿勢を身につける。

●理想的な国際協力の在り方を考えることで、この後に自分自身が「貧困と格差」の解決に向けてできることを考える動機づけとなる。

（エ）指導のポイント

●ザンビアでの研修全体を通して私自身が学んだ「理想的な国際協力の在り方」を生徒にも読み取らせるために、本時の授業の軸となる問いを「理想的な国際協力の在り方」に設定する。

●現地で活躍する日本人へのインタビュー等、ザンビアでの研修で収集した資料を教材化する。

●AL の一つの手法である知識構成型ジグソー法を用いて、生徒同士の対話によって本時の問いに答えていくように授業デザインする。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 10 分	●本時の流れの説明 ●日本の国際協力の現状を説明	○本時の授業テーマをノートに写す	一斉 一斉	●前時の内容の確認 ●重要そうな内容はメモをとるよう指示	
展開 35 分	●本時の「問い」を提示【1】	＜①「問い」に挑戦＞ ○既存の知識だけで「問い」に答える ＜②エキスパート活動＞ ○エキスパートシートを読み、「問い」に答えるカギとなりそうな部分をチェック【4】 ○同じエキスパート同士の２～３名で、読み取った内容を共有【3】 ＜③ジグソー活動＞ ○A～Cそれぞれ１人ずつの３人グループをつくり、互いの情報を共有【3】【7】 ○共有した情報をもとに、「問い」の答えを考える ＜④クロストーク＞ ○各班の代表者が「問い」の答えを発表【2】【7】 ＜⑤「問い」に再挑戦＞ ○一連の活動を踏まえて、「問い」の答えを完成させる【6】	個人 個人 ペア グループ 全体 個人	●文章で書けない場合には箇条書きや単語だけでも書くよう指示 ●後の活動で他の生徒に伝えられるように、「メモ」欄に自分の言葉でまとめるよう促す ●欠席者がいる場合には適宜メンバーを変更 ●ワークシートにメモをとりながら話し合うよう指示 ●必要があればワークシートにメモをとるよう指示	●話し合い活動等に積極的に参加している（態度） ●話し合い活動等に積極的に参加している（態度） ●自分なりの意見を持ち文章にまとめている（ワークシート）
まとめ 5 分	●丸森町プロジェクトと遺伝子組み換えについて補足説明	○「学習プロセスシート」に、「貧困と国際協力」についての自分の考えを書く【1】【2】【6】	一斉 個人	●次時の内容の確認	●自分なりの意見を持ち文章にまとめている（学習プロセスシート）

（2）授業の振り返り

授業後の「問い」の答えを見ると、事前に期待していた「お互いに利益になる」「自立を促す」といった要素を満たしていたものがほとんどであった。ただ、エキスパートの設定については改善すべき点が2つある。1つ目は、エキスパートA・Bともザンビアで活躍する日本人のインタビューをそのまま表した文章のため読解が容易であったこと、2つ目は、エキスパートA・Bだけでもある程度「問い」に答えることができるようになっていたため、理想的な国際協力の在り方として不適切な例を示したエキスパートCが生きなかったことである。これらの改善策としては、エキスパートA・Bから相手国の「自立」という要素を抜くことでエキスパートCを引き立てたり、エキスパートCの多国籍バイオ企業と同様にビジネスでザンビアに進出している日立建機が同国の「自立」を促す活動をしている点を加えたりする方法が考えられる。

（3）使用教材

図5

図6

図7

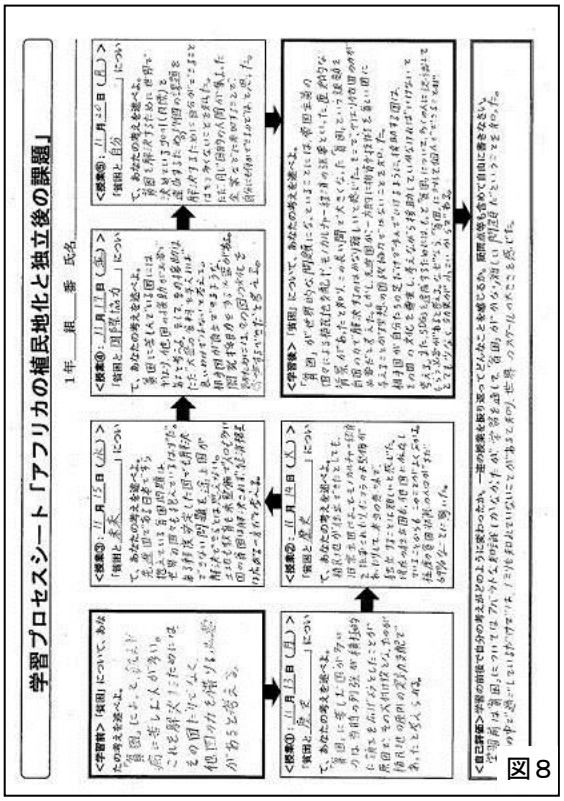


図8

（4）参考資料等

●文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説　地理歴史編』
●東京大学 CoREF（2015）『協調学習授業デザインハンドブック―知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり―』
●宮城県丸森町「丸森ザンビアプロジェクト 第1回丸森研修レポート」
＜http://www.town.marumori.miyagi.jp/data/open/cnt/3/3010/1/1-j.pdf＞（2018 年 1 月 5 日）
●中島みゆき（2013.8）「アフリカ「10 億人市場」の素顔③--「自律」の条件」『メッセージ＠pen』（電子版ジャーナル誌）、綱町三田会倶楽部
＜http://www.tsunamachimitakai.com/pen/2013_08_004.html＞（2018 年 1 月 5 日）

8 単元を通した生徒の反応/変化

「貧困」に対する生徒の記述の授業前後における変化（「学習プロセスシート」より）

【授業前】「貧困によって飢えや病に苦しむ人が多い。これを解決するためにはその国だけでなく他国の力を借りる必要があると考える」 ⇒ 【授業後】「貧困が世界的な問題になっていることには、帝国主義の国々による植民地支配やモノカルチャー経済といった歴史的な背景があったと知り、この長い間で大きくなった貧困という課題を自国の力で解決するのはかなり難しいと感じた。そこで、やはり他国の力が必要だと考えた。しかし、先進国が一方的に物資や技術を貧しい国に与えることが理想の国際協力ではないことを知った。相手国が自分たちの足だけで歩んでいけるように、援助する国はその国の文化を尊重し考えながら援助していかなければならないと考える。また、SDGs を達成するためにはもっと貧困について多くの人に認識してもらう必要があると考える。」

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P （計画）	【海外派遣前】 ●生徒の主体的な授業参加を引き出すという点においては、「国際理解教育／開発教育」と「AL」の両者が同じ方向性を持っていることに着目し、以前から授業に取り入れていた AL の手法である知識構成型ジグソー法を用いた単元構成を考えた 【海外研修中】 ●高校の世界史Ｂで実践するため、旧宗主国のイギリスや銅のモノカルチャー経済といった歴史的な要素を含む情報を収集したり写真を撮影したりすることに努めた 【海外派遣後】 ●海外研修では多くの資料と膨大な情報を入手したので、それらの中で最も生徒に学び取ってもらいたいテーマを「貧困と格差」に限定することにした ●生徒に「貧困と格差」というテーマを毎回の授業で意識してもらうため、派遣前研修で学んだ一枚ポートフォリオを使うことにした
D （実行）	●アフリカの歴史から「貧困と格差」を自分事として捉える全５回の授業を実施した ●定期考査において、本単元に関する論述問題（30 点分）を出題した
C （検証）	●知識構成型ジグソー法をはじめ、フォトランゲージやダイヤモンドランキングといった手法により、生徒の積極的な授業参加を引き出すことができた ●本単元の授業前後において、「貧困」に関する生徒の記述が増えて学びが深まった ●国際協力の現場で活躍する人たちが持っている問題意識や援助を受ける側の人たちのニーズにまで踏み込んで授業デザインをすることができなかった ●一枚ポートフォリオの記述を評価対象にできなかった
A （改善）	●地理歴史科の他科目や他教科と連携して、様々な視点から継続的に国際理解教育／開発教育を進めていく ●一枚ポートフォリオを他の単元で実施し、ルーブリックを事前に作成して評価対象とする

10 教師海外研修に参加して

ザンビアでの研修では、JICA スタッフなど現地で活躍する日本人や援助される側であるザンビア人の生の声を聞いたり、観光旅行では絶対に立ち入ることのない農村で実際に営まれる生活を見学したりと、貴重な経験をさせてもらった。国内の研修では、国際理解教育／開発教育を実践する手段として様々な授業法を紹介してもらい、それらを自分自身の授業実践で実際に使うことができたことが私自身の大きな成果である。本研修で得た視点や授業法を使って、少しでも生徒の世界へのハードルを下げられるように、引き続き国際理解教育／開発教育を実践していきたい。